

「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

ソロテントソロバーベキュー天高し 橋本 恭子

コロナウイルスが流行ってから集団での行動は難しくなった。故に単独で山や溪谷に入りテントを張ってソロキャンプする。勿論バーベキューも一人。ソロキャンプで独りの自由さを覚えると、コロナが収束しても集団の煩わしさや同調から忌避したい気持ちになる。最近はそのような人が多くなつたそうである。一人になりたくて自分用の山を購入しそこでソロキャンプしている芸人も居るくらいだ。先ずは火を熾そう。天高し。秋の澄んだ空の下で、さて独り何をしようかと。

帰りたき父母の家なく秋祭 長谷川菊男

父母すでに亡くその家も処分されていて、故郷に帰るうにも帰れない。でも、その家の辺りだけでも見たいという気持ちは誰でも持つている。昔自分が遊んだ場所や友達の家、学校、初めて御遣いで行った卵屋さんとか。折しも作者は故郷で秋祭と出合った。秋祭は秋の収穫を祝う行事なので賑やかだが、賑やかな分、淋しさが募ることもある。望郷、父恋い、母恋いの一句。

鰯雲漁夫は大漁の兆とす 畑野 竹代

鰯は太平洋岸では秋に獲れる。殊に鰯雲が空に現れると鰯は大量に獲れるとのこと。八戸辺りはセグロイワシ、カタクチイワシ。それを煮干しにするために大釜で煮る。(ゆるやかに沖へゆく雲いわし煮る 関川竹四)の句が八戸にある。同じように鰯雲が出ると秋鯖がよく獲れるという。大漁旗が翻るのを想像しながら、幾万の鰯雲を目で追つていくと愉しいだろうな。

住み旧りて桜紅葉の似合ふ町 浜田 優子

桜並木の美しい町に住む作者。永く住むその町はもう故郷と言つてもいいくらい身に馴染んでいる。花の季節が終り、今は紅葉の季節。この桜紅葉もどう？ 美しいでしょう！ この町にお似合いですよ！ 心から我が町を愛する作品に共鳴した。

長き夜へ音零しゆく救急車 原田ミチ子

一日中救急車の往来する音が聞こえてくる。昼間はさう感じないけれども夜のサイレンは心の芯にまで響く。深夜ともなれば尚更だ。この句では秋の夜長を走る救急車の音を詠む。搬送される方がどのような人なのか、コロナではないだろうかなど、色々のことが脳裡を掠めただろう。「音零しゆく」の措辞が夜の静寂を深める。

永遠の季節のごとく蟬が鳴く 平野 豊雄

蟬時雨。命短い蟬が集まり、俺たちに明日はないかのように夜明けから鳴き始める。人生で言えば、青春期の或る年のひと夏。無軌道、刹那。生きている証と言え格好いいが、無我夢中で生を急ぐ。「永遠の季節のごとく」蟬はこの夏を使い切つて命を散らす。高層ビルの窓から蟬が急いで上昇していくのを見たことがある。暫くしてその蟬は、真下に落ちていった。

夜の秋どちらからもなく歌ふ 平野 美子

懐かしい唄が脳裡に浮かんだ瞬間に、連れ合いがその唄を歌い始めたということを経験か体験したことがある。この句では、ほぼ同時に二人が歌い始めたという。以心伝心というか仲が良いというか、他人事ながら、夏も終ろうというこの夜の小さな出来事に心が和んだ。

草かげの水あるところ秋のこゑ 福井 芳野

「秋の声」は「風雨の音、木の葉、笹の葉のそよぎにも、秋の気がこもつて、寂しくすこみが感じられる」と歳時記に書かれている。この句の「草かげの水」は池なのだろうか、小川か、水溜まりなのだろうか。いずれにしてもその水あるところには自然界の様々な命が集まり宿る。その気配を感じ取れたのがこの句の手柄。

灯火親し仰臥漫録読みかへす 舟生 信子

正岡子規の『仰臥漫録』には、明治三十四年九月二日から亡くなる翌年九月まで、ほぼ一年間の闘病生活、食生活の様子が収められている。岩波文庫版巻末の阿部昭の「解説」を一読するだけで涙を禁じ得ない。子規の命日を控え、舟生さんもあらためて子規を偲び、その詳細なる日記や文章を再読した。「灯火親し」は子規への敬愛の情。

裏木戸より帰る子規庵鶏頭花 本多 遊子

根岸の子規庵。玄関から靴を持って上がり、子規の過ぎた部屋と机、鶉籠や展示物を拝見し庭へ出る。小さな庭には勿論、鶏頭が咲いている。柵には糸瓜が下がり、糸瓜から管が伸び糸瓜水が取られている。それだけでも子規の晩年の暮しを偲ぶことができる。出口は裏木戸ということになるか。雪の季節に近所の方が一人、庭の雪掻ぎに来ていたのを見たことがある。この裏木戸から出入りしていたと思う。本多さんは裏木戸を出る辺りで何度も庵を振り返つたに違いない。そういう句である。

「ぐりとぐら」残る本棚小鳥来る 持田きよえ

薄い絵本だが、我が家でも三十年以上も前に二人の子にこの『ぐりとぐら』を買っている。双子の野ねずみ、

「ぐり」と「ぐら」を主人公とする物語である。作者宅でも同じように、かつてはこの本をお子さんに読み聞かせていたのだろう。捨てがたい絵本だったのか、子どもが独立後も実家の書棚に収められている。さて、この句の「小鳥来る」はもちろん季語であるが、「ぐりとぐら」の物語に入りたさそうに来た小鳥と読んでもいいようだ。絵本の中で小鳥が親しく舞へば楽しいかもしれない。

しらじらと銀河しろじろと晩年 森尻 禮子

この句のほかに〈健診に知る背のちぢみ茶立虫〉があつて、作者にとつて今は老いが一つの課題となつている。と言つても、そう深刻ではなさそうで、「しらじら」と「しろじろ」の言葉遊びと「銀河」「晩年」の取合せ、対比には余裕さえ窺える。「しろじろと晩年」のしみじみとした余情に共鳴した。

遠き日の固き誓ひや実むらさき 八尋 信子

「固き誓ひ」は作者の人生を決定づけた過去の出来事を指しているのだろう。それは今日まで変わることなく心の支えとなつている。実紫からいにしえの貴族の恋のやり取りなどを想像してしまつたが、恋を象徴していることは間違いないだろう。

勾配の緩き古い坂実紫 山下 道子

実紫のあの艶やかな色は、出せと言つても出せない色だ。人間で言えばある程度年季を積まねば出ない色。山下さんは老いをずっと詠み続けていて、今回は自身の歩む道を「勾配の緩き古い坂」と詠んでいる。急な坂ではなく緩き坂というのがいかにも堅実な作者らしい表現で、それが美しい実紫に結実している。

黄蝶とぶ肥後下屋敷秋日和 山田 雅子

元熊本藩主の細川家の下屋敷。今は、細川庭園として開放されている。関口芭蕉庵の近くで、池があり句会もできる立派な建物が残っている。鮮やかな黄蝶が樹木草木の間を舞い、眩しいくらいの陽気の秋である。肥後の古き世を偲びながらの充実した一日だったことだろう。

木の葉髪人を愛せし日のはるか 夢 十夜

木の葉がしきりに落ちるように、人間の髪も晩秋から初冬にかけてはらはら落ち、その度を加える。自分の生きてきた人生とは何だったのか、これからどうなるのかといった感慨や不安が「木の葉髪」に籠められていて、切ない。この句の「人を愛せし日のはるか」の強い詠嘆からは、心から愛して止まない人を愛した作者の青春像が見えてきて、これも切ない。

すいと来て洗濯物に赤とんぼ 旭 光

なんの計らいも感じさせない素直な句。干し物に色鮮やかな赤蜻蛉が止まったその一瞬を言い留めている。難しい言葉は一つもなく、焦点もはっきりしているので安心して読める。「すいと来て」に安らいだ感じがある。

地球から脱出の夢月嗤ふ 東 祥子

睡眠中の夢なのか、作者の希望として夢なのか。いずれにしても、作者はこの混沌とした世の中、人類が汚しつつある地球という母星から逃れたいのだ。で、どこへ行く？ 月か。地球の次に人類は月の環境も壊すのか？ などと作者も考えてしまうが、その前に月が「冗談言うてもらったら困りませ」と不敵に嗤うのだ。危うい今の世が生み出した一句。

荷が肩にくひこむ家路夕月夜 荒尾寿美江

何か重い荷物を肩に掛けながら家路を急ぐ作者。何の荷か。人生という重き荷と読むことも出来るが、ここは素直に、戴いたお土産の品や引出物などを想定したい。「夕月夜」は陰曆八月の二日月から上弦の頃までの、宵に現れ夜半には没する月、いわゆる弓張月といわれる宵の間だけ月のある夜をいう。作者は肩に痛みを感じながら、夕暮れの残映と月の微光が分かち難くおぼつかない

薄明りの中で、この夕月夜の詩情を満喫している。

秋薔薇に息をふき込むやうに風 伊澤やすゑ

秋の薔薇と風。薔薇は秋涼しくなつてから二度目の季節を迎える。ゆつくりと咲き日持ちもするという。掲出句ではその秋薔薇に風が吹く。ただ吹くのではなく「息をふき込むやうに」吹くという。息を吹き込めば、一休みしている薔薇は目覚め、息を吹き返すのだろう。あたかも瀕死の人間のように。鋭い角度から秋薔薇と風を詠み、しかも詩情を確り湛えている一句。

燕去り巢に残されし赤き紐 石井 佐知

赤い紐がどうして燕の巢にあつたのか不思議に思う。でもそういうこともあるのだろう。「残されし赤き紐」は真実に違いない。運命の赤い糸ではないが、この赤い紐は次の年へと繋がっている。燕は来年、この紐を目印に飛来すればいいのだ。

秀野忌の選られし百句読む秋夜 石垣喜代子

俳人石橋秀野の遺した句と評伝を読んだ作者。秀野というと私は〈ゆく秋やふくみて水のやはらかき〉〈星降るや秋刀魚の脂燃えたぎる〉くらいしか知らない。明治42年の生まれ。与謝野晶子に短歌を、高浜虚子に俳句を

学んでいる。文芸評論家の山本健吉と結婚し戦前は石田波郷の「鶴」で活躍したが、戦時中の疎開生活で病を得て戦後間もなく38歳で亡くなった。自分の命を見つめて続けて句作したその生涯が山本安見子著『石橋秀野の一〇〇句を読む』に取められている。物静かな秋の夜に読んだとのことだが、その鬼気迫る句に作者は涙ぐまれたかも知れぬ。(緑なす松や金欲し命欲し 秀野)

残る虫ひとり遊びにバズルなど 市村 啓子

秋冷至るにつれて虫の音も少しずつ消えていく。残る虫の声も侘しく聞こえる。虫だけでない。作者もまた、ひとり遊びをせざるを得ない身の上。バズルをひたすら解き、長き夜を過ごす。「バズルなど」に諦めと淋しきの心情が隠されているように思える。

はつきりとせぬ死神の秋の声 岩根 甲

死神は枕もとに居る。足もとに居ればまだ助かるが、この作者の場合はどうだったのか。「秋の声」は木の葉や風雨の微かな音など少し寂しきの感じられる声。その声から「死神だ、いよいよ迎えが来た」と悟った闘病中の作者。死神と交渉し死期を遅らせて貰おうと思つてもその死神の声が今一「はつきりとせぬ」。今日も秋風が死神を連れて来た。今宵も聴くがはつきり答えてくれない。

麻酔覚む窓に電線 雲 牛込はる子

麻酔から醒めたばかりの目で眺めた風景。手術は成功した。窓の外の景色が目に入り、生きていくという実感が湧いた。先ず目に留まったのが電線というのが微笑ましい。人間の目は横に二つ付いているので、横長の電線に気が付いたのだろう。次に「雲雲」。全天を泳ぐ雲雲の美しさ。健康が快復し何よりでした。

菊人形の武士の怖さや足早に 内海 範子

下五の「足早に」は足早に立ち去つたという意で省略が効いている。菊人形は可愛いのもあれば、功遂げた偉人のももある。しかし、多くは哀しみを背負つた歴史上の人物。作者が見て怖いと思つた武士と言えば、悲壮感漂う新選組の鬼の副長土方歳三あたり。月に雄叫び血刀翳し……そういう菊人形は居ないと思うが、怖い。

街路樹の紅葉の錦街を染む 大下 壽櫻

紅葉の季節。いろいろの樹々が色づいて私たちの目を染ませてくれる。街路樹であれば紅葉狩に行かなくても日々の暮しの中で見ることでできるので助かる。この句では、その街路樹が街全体を紅葉一色に染めているという。「紅葉の錦」と表現しているのがまことに美しく、生き生きとした街を映し出す。

めつむりて坐すや花野は吾が浄土 太田 裕子

海岸の小高い丘でヨガしている人を見たことがある。波音や鳥の声、子どもたちの声などが瞑想の耳に入ってきたことだろう。掲出の句ではその場所が花野である。秋草が咲き乱れた野に出て、作者はその余りの美しさに思わず座してしまふ。瞑る目に花野の花が満ち溢れ、とうとう「吾が浄土」と思うに至る。「花野は吾が浄土」と明快に言い切ったところに清々しさを感じた。

子と母と持つ捕虫網空ウを切る 小河原政子

母子がそれぞれ長い捕虫網を手にして蜻蛉を採ろうとしている場面を想像した。臆する子を母が導きながら、中空へ網を差し出しさつと一振り。少し遅れて幼子も網を振るが、母子とも空ウを切ってしまった。そこが何だか微笑ましく、楽しく、この続きを見たくなくなった。何回も試みて、最後は捕えることができたのでしょね。

部屋隅のコードのとぐる秋灯 金子かほる

部屋の隅のコンセントに繋がっているコードの束。こんなコード類も俳句の素材になるのだ。詩情からはほど遠い言葉なのに、「秋灯」と組み合わせたことで俄然詩情を獲得した。暗い部屋を灯したときに、コードが「私を見て！」と言ったのかも。

おさんどん厭ふ老いの身初時雨 金子 学

立居振舞が思うようにいかなくなる。老いから来る筋力の低下やさまざまな疾患。台所に立つことが面倒になるのは作者だけではないだろう。そんな自分の状況を「初時雨」に託しているのがこの句である。初時雨は初めて降る時雨を愛でる季語であるが、ここでは初老の作者を優しく包み込む時雨として登場している。

道綱の母の嫉妬や秋簾 金田 知子

「藤原道綱母」は平安時代の歌人で『蜻蛉日記』の作者。長い結婚生活の様子を綴り、その間の妻としての嫉妬や苦悩、そこから母性愛に目覚めていく過程を描く。翻って作者はその道綱母の「嫉妬」に我が身を振り返る。どのような嫉妬かは知る由もないが、同じような思いをした経験があるのだろう。秋簾は簾の名残。へおのづから世を隔てけり秋簾 白水郎)のような雰囲気この句は醸し出している。

夫残す鉄骨棚の青ぶだう 金田 喜子

夫がかつて作った葡萄棚。すでに夫は亡いがその鉄製の棚は今も健在のようで、今年も青葡萄が生った。生きている時には一緒にその棚を見上げ、収穫もした葡萄棚。その鉄骨の無骨さと青葡萄から在りし日を偲ぶ作者。

筆箱の蜥蜴ひんやり尻尾出す 北 好夫

昔のセルロイドの筆箱を思う。捕まえた小さな蜥蜴をその筆箱に入れ、ときどき様子を見るため筆箱の蓋を開ける。すると蜥蜴は尻尾を出してきた。爬虫類だから触ると冷たい。作者はそれを「蜥蜴ひんやり」と表現した。それがこの句の眼目で、素直な作品に仕上がっている。

空の青吸うて桔梗咲き揃ふ 栗原 季星

桔梗は溝萩、女郎花（アワバナ）などと同様、仏さんを迎える盆花の代表格の花。紫や紺の美しい色が印象深い。その色は「空の青吸うて」完成したのかも知れない。作者は直接言及していないがそう解釈してもよからう。「咲き揃ふ」の鮮やかな彩と青空との対比も面白い。

ねずみの巣実りまぢかの稲集め 小唄あゆみ

鼠捕りを見た最後の世代として興味のある一句。都会ではなく稲作のある地域に棲む鼠たち。早々と食料を溜めこみ冬に備えている鼠たち。その巣を覗いたら、なんと「実りまぢかの稲」が集められていて、優しい作者はその光景に尊敬に似た思いを抱いたかも知れぬ。信州では「鼠が居るのは豊かなあらわれ」と考え、悪さをする鼠にも大晦日には「ネズミの年取り」といって、餅やご飯を鼠の出そうな所へ置いたりする風習があった。

ラプソディー・イン・ブルー流るる九月尽 小泉まり子

「ラプソディー・イン・ブルー」はアメリカの作曲家ジョージ・ガーシュウインの管弦楽曲。ガーシュウインには「スワニー」「サマータイム」「ス・ワンダフル」「エンブレイサブル・ユー」などピュラーの名曲も多く、ジャズでも「ザ・マン・アイ・ラブ」はマイルス・デイビスとセロニアス・モンクのセッションで夙に有名だ。さて、「九月尽」は陰暦の九月晦日のことで、秋を惜しむ心が籠められている季語である。その心で作者は、この名曲を聴いている。

石榴の実秒読み前の慎ましき 小濱けえ子

「秒読み前」とは石榴の実が熟れてパクンと裂ける、それ以前ということ。作者がこのような句を詠むというのは石榴が弾けるのを期待しているから。石榴が赤い歯を剥き出しにして割れるのを心待ちに「秒読み」しているのだ。眼前の石榴はまだ慎ましいが、そのうちに凄みを増してくる。そこから秒読みが始まるのだと私は勝手に思っている。石榴を温かく見守っている心。

さいならへほなまた夏の別れかな 小林ゆきお

「さいなら」「ほな、また」。簡単な別れの挨拶だが、気心が知れている者同士の普段着の会話である。次はい

つ会えるか解らないのに、深刻にならずさりげない挨拶で別れる。庶民の知恵である。夏もそろそろ終る。

郁子なるかな珈琲うまし郁子の茶屋 小林 玲

郁子は通草の実と似ている蔓植物。「むべ」と読む。そこから発想豊かな作者は「むべなるかな」（宜なるかな）なる慣用句を探し出してきた。つまり珈琲が美味しいのはむべなるかな（もつともなことであるなあ）と。こういう言葉遊びは日本の伝統文芸であり、駄洒落と言う勿れ。洗練された可笑しみが楽しい。

一時停止怠りし罪秋刀魚食ふ 斉藤久美子

秋刀魚を食べる贖罪？ 自家用車の一時停止を忘れたことに自身ショックを受けたものと推察する。それ以前はきつと無事故だったのだろう、一時停止を怠った自分が許せない。人身事故でも起こしたらと思うと尚更だ。それにしてもその傷付いた心がどうして秋刀魚に向かったのか。無性に食べたくなつたか。

秋の空さよならの声角曲がる 佐藤 和子

何人かの下校児が歩いてきて「さよなら」の挨拶をしたというだけの句だが、その声が「角曲がる」と詠んだのがとても新鮮である。角を曲がつて姿が見えなくなつ

た後もその「さよなら」の言葉が残響として微かに聞こえてくるのだ。まだ明るい秋の空の下。

蓑虫鳴く無医村となる大都会 清水 悠太

蓑虫は実際には鳴かないが、古来、秋風が吹けば「父よ父よ」と鳴くものとされてきた。「無医村となる大都会」はコロナウイルス感染拡大により東京の医療体制の脆弱性が露見したことへの大いなる皮肉。入院することも出せず「自宅療養」の美名のもと死んでいった多くの人たち。実際は「自宅放置」であつて、もはや東京も無医村かと嘆く作者。父よ父よと鳴く蓑虫の季語がこの句では絶大な効果をもたらしている。哀しい現代俳句である。

暗れ惑ふ花野の中の二人かな 新海あぐり

暗れ惑うは、途方にくれるの意。美しい花野に来て、二人が途方にくれている。その一人は作者自身であると思つていい。この句に続き「立入禁止区域どこまで花野かな」の句が置かれているので、二人は知らず知らずのうちに立入禁止の花野に入ってしまったのか。謎めいた句で、いろいろ想像したくなる。

寝つかれぬ九月はラジオ深夜便 島 昌子

今春からNHKの「ラジオ深夜便」を聴くようになって

た。深夜に何回も起きるので自然の流れでこの番組に辿り着いたということになるうか。二時台は「ロマンチックコンサート」、三時台は「日本の歌こころの歌」という昔の流行歌専門番組。歌手別、作曲家別、作詞家別、テーマ別に選曲されるので聴き入ることしばしば。「寝付かれぬ」作者と同様である。九月は仲秋。残暑から少しずつ涼しくなり、深夜は八月に較べもの寂しさが増す。悪夢に目覚めそれから眠れないことも。そんな時は「ラジオ深夜便」。いつの間にか作者も眠りにつくのでしよう。

わが庭のごとし隣の額あぢさる 菅原 淑子

「わが庭のごとし」が秀抜。隣家の庭に咲く額の花の群生の様子がこの措辞からよく見えてくる。作者の庭もそのお零れを戴いたようで一気に明るくなった。梅雨どきの憂鬱な気持ちも少しは晴れて、有難いことである。

釣つ子のバケツにワアツと鱗雲 杉淵真喜子

空を流れる鱗雲。その雲が釣りに来ていた子ども、水を張ったバケツいっぱい浮かんでいるという風景。まだ何も釣り上げていないことがこのことから解かる。「ワアツと」は鱗雲を発見した作者の驚きの言葉。そう表現したことで鱗雲の生き生きとした様子が活写された。小さなバケツに鱗雲がぎっしり詰まっている不思議。

三陸の津波供養や揚花火 鈴木 智子

相馬港を見下ろす所で「東日本大震災犠牲殉難霊位」の卒塔婆に手を合せたことがある。今は相馬市に伝承鎮魂祈念館が建っていると聞く。同じように大きな被害を受けた宮城、岩手の海岸沿いにも復興伝承館や津波伝承館が建ち、地震・津波被害の全容と怖さを伝えている。また、亡くなった方々の御霊の安寧を願う様々な行事が行われていて掲出句の揚花火もそのためのものだろう。「津波供養や」の「や」に祈りが籠められている。

老いも出て転ぶ地区民運動会 鈴木 藤子

地元の運動会が開かれて賑やかな秋。広場に子どもから大人までたくさん出場している様子が目に浮かぶ。昔の運動会では紙で指定された人を探してその人と子どもと一緒に走る競技があり、ご老人もよく借り出されていた。慌てて走るのだが足がついていかず転ぶと、回りから「頑張れ！」の檄が飛ぶ。掲出句はそんな明るい一句である。何となく生きる気力を戴いた。

木犀やきのふとちがふ朝となり 高橋満利子

窓を開けると良き香りがし、瞬時に金木犀の匂いと判る。そのくらい鼻を刺激する花。梅の花が咲く時期にもそうなのだが、木犀の方が確かに香りが強く伝わって

る。この句では「きのふとちがふ朝」と表現されていて、成るほどと思った。昨日の私でなく、今日の私が新しい香りを頂きながら今日という日の暮しを始める。新鮮な一日でありますように。

トンネルを貫ければ越後刈田道 高橋美智子

川端康成の『雪国』のような句だが、まだ稲刈りが終わったばかりで雪は無い。だとしてもトンネルを抜けた先の「越後刈田道」の景はとても大きく印象的だ。秋仕舞いの、もう直ぐ冬が到来するというこの時期の静けさは特別なもの。些か寂しい刈田を旅枕として、これから作者はいずこへ向かうのか。

かなかなや二度と来ぬ日をうかうかと 竹森 美善

「かなかな」と「うかうか」がうまく響き合って俳諧味のある句となった。「二度と来ぬ日」は、何か特別な日ということではなく、明日の我が身はどうなるか解らないので今日を精一杯生きようという、その「今日」。ただしその作者でも大切な一日なのに「うかうか」と過してしまふこともある。掲出句は鯛の哀しげな調べを聴きながらの自省の一句と見たが、それほど深刻ではなさそうだ。むしろ、そういう自分を達観している節もある。

針生姜たつぷり添へて小籠包 田中 京

生姜は弱っている体力を回復するには一番の食材で、料理には欠かせない。針生姜は「生姜の皮を剥いてから横に出来るだけ薄く、紙のように削いでいく。針のように細いほど味のよいものです」と料理の本に書いてある。小籠包は嚙まずに真上から中の汁を吸う。添えてある針生姜は口がさつぱりするし、体がほかほか温まる。掲出の句では「たつぷり添へて」とあつて、見た目も綺麗。余談だが、お吸物の「のりすい」も好き。炙った海苔を細かく揉み腕に盛って、針生姜を一つまみのせる。その上から熱いダシをたつぷり掛ける。

たうたうと川は透徹すすき原 寺田 幸子

芒原を割って滔々とよどみなく流れる川。水の秋だ。濁ることなく透き通って流れている。ただそれだけのことだが、「川が透き通って綺麗だ」と表現しないで「川は透徹」と有無を言わず断定したことにより、緊張感の高い作品に仕上がり、詩情も獲得し得た。芒原もひと際美しく見えるようだ。

手を洗ふ柚子師が見え桐一葉 長井 敦子

亡き鍵和田柚子先生を偲ぶ一句。「手を洗ふ」師は、かつて何処かで見掛けた記憶の中の先生。まだお元気な

頃の、にこにこ微笑んでいた先生。今年も桐の花が咲き、そして散り、今はその葉が散る。桐一葉。先生ご入院先の病院までの坂道にも桐の木があつて、一昨年のことだったが鮮明に覚えていて。作者も私も、にこにこ笑つてらした時の先生が今でも一番好きである。

山あひの村に銀座やばつた飛ぶ 中嶋きよし

銀座の名の付く通りは日本全国にたくさん在る。都内にも戸越銀座、砂町銀座など。この句の「山あひの村」にも銀座があるとのことで、作者が行つてみたら何と、蟻蛸が頻繁に跳んでいた。銀座に蟻蛸？ と作者も驚いたろう。銀座と蟻蛸の取合せに意外性がある作品。

澄む秋の今朝は葉缶を磨きけり 中代 曜子

気持ちのよい句。葉缶を洗うだけでなくそれを磨くというのは凄い。気分を変えるためには言え、その切り替えるパワーはどこから来るものなのか。自堕落な者には羨ましく且つ妬ましく思えるが、「澄む秋」の朝の為せる技なのだろう。下五の詠嘆の「けり」が潔い。

雨去れば日暮は一気冷やかに 中村 敬子

上五中七の「雨去れば日暮は一気」のリズムが心地いい。雨上がりのあとの釣瓶落し。「冷やか」は秋に入っ

てから覚える冷気で、「秋冷」とも「ひやひや」「冷ゆる」ともいう。体感から生まれた季語である。その季語を巧みに用いた一句。

美味しいか追ひしなのかと文化の日 中村 東子

日本語の美しさを追求した一句。文化の日らしい趣向を施している。「おいし」が「美味し」なのか、「追ひし」なのかと、殆ど意味をなさない、政治家から見れば生産性のないことを真摯に論じている。でも、それが文化だろう。童謡『ふるさと』の「兎追いしかの山」。

為て遣らる蚊は進化して寡黙なり 中村 幹子

してやられたのは作者。ブーンと耳元で音がすれば逃げられたものを、最近の蚊は必殺仕掛人のように黙つて刺す。確かにいつの間にか手の甲を刺されていることがある。この句の面白いのは、寡黙を蚊が進化したからと捉えたこと。地球温暖化で南方の蚊も北上するとか。

悔み文書けずバナナの斑のみ増ゆ 野沢 慶子

中村汀女も「お悔み状は書きにくい手紙の一つです」と書いている。人を慰める言葉は難しい。掲出の句では書こうと思つていたがバナナの斑が増えるくらい日にちが経つてしまったと嘆く。「バナナの斑」が巧いなあ。